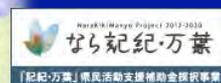


第 2 回「記紀・万葉」ふるさとフェスティバル・stage☆2nd.

今回のテーマ「古事記」の古琴のこと

松岡徳郎  
フルート & オカリナ  
コンサート (其の五)  
「記紀・万葉」の心を奏でる



平成 28 年 9 月 24 日 (土) 午後 1 時 ~ 2 時 30 分

登録有形文化財「藤岡家住宅」大広間にて

1 時 ~ 1 時半・「古事記」「日本書紀」に登場する「琴」について講演 (川村優理)

朗読「スセリ姫と不思議な琴」宮内厚子 オカリナ演奏 ニッキーズ

1 時半 ~ 2 時半 フルート & オカリナ演奏

入館料のみ (高校生以上 300 円・小中学生 200 円)

お食事ご希望の方は別途 1400 円 (かめくま・松花堂) を用意します。お食事は 11 時半から。ご予約下さい



天の沼琴を再現した出雲琴

登録有形文化財「藤岡家住宅」管理法人・NPO法人うちの館 (やかた)

〒637-0016 奈良県五條市近内町 526 ☎・FAX 0747(22)4013

info@uchinono-yakata.com

午前 9 時 ~ 午後 4 時 月曜休館・月曜が祝日のときは開館して翌日休館

## 第2回「記紀・万葉」ふるさとフェスティバル・ステージ 2nd.

松岡徳郎フルート&オカリナコンサート「記紀・万葉」の心を奏でる ～今年のテーマ「古事記」の古琴の話～

天の沼琴（あめのぬごと）と 大穴牟遲神（おおあなむじのかみ）

文 川村優理

大国主神（おおくにぬしのかみ）は、その前の名前を大穴牟遲神（おおあなむじのかみ）といいました。大穴牟遲神の兄弟はたくさんいて八十神（やそがみ）と呼ばれています。そのすべての神さまは、国は大穴牟遲神に譲るけれど、その代り、因幡の八上比売（やがみひめ）と結婚したいと言いました。そこで皆は一緒に因幡に行くことにしました。大穴牟遲神はみんなの荷物を入れた大きな袋を背負い、後についていきました。八十神たちは、どんどん先に行ってしまうしました。

さて大穴牟遲神が重い荷物を背負って、やっと気多（けた）の岬というところに着くと、一匹の兎が泣いています。「どうして泣いているの？」と尋ねると、兎は、泣きながらわけを話しました。

「ぼくは淤岐（おき）の島に住んでいる兎です。海を渡ってこの気多の岬に来てみたかったので、海の水（ワニ）に嘘をつきました。兎の一族と、おまえさんたちワニの一族とどちらの数が多いか比べよう。海にワニのみんなが並んでくれたら、僕が数を数えてあげるからと言ったのです。ワニが島から岬までずらりと並んだので、ぼくはワニの背中の上をとんで海を渡りました。でもそのあとでワニたちは、自分たちが騙されていたとわかって、ぼくの毛をむしりました。痛くて泣いているところに八十神たちがやって来ました。そして、傷むのなら、海の水を浴びてから、高い山の尾根で風にあたって寝ていなさいと言ったのです。ところが、その通りにしたら、海の水が乾くにつれて、からだがりひりひりして、もっと痛くなってしまいました」

大穴牟遲神は、急いで兎に教えてあげました。

「今すぐ、川に行ってお水でからだを洗ってきなさい。それから川に生えているガマの花をつんでまき散らし、その上でごろごろ転がってごらんください。きっと治るよ」

言う通りにすると、兎のからだはすっかり元に戻りました。兎はとても喜んでお礼の言葉を言いました。

「ぼくにいじわるをした八十神たちは、ぜったい八上比売さまと結婚できませんよ。八上比売さまは、大穴牟遲神さまと結婚します」これを聞いて、八十神たちは怒り、大穴牟遲神を伯岐国（ほうきのくに）の手間の山（てまのやま）のふもとに連れ出しました。

「なあ、大穴牟遲神よ。この山には赤い猪がいるのじゃ。われらが猪を追いおろすから、お前は下で待ち受けていてつかまえる。つかまえられなければ、お前を殺す」

大穴牟遲神が山の下で猪を待ち受けていると、八十神たちは、猪ではなく、真っ赤になるまで焼いた大きな石を転がしました。大穴牟遲神は、猪と間違えて、焼いた石を受け止め、焼け死んでしまいました。

大穴牟遲神のお母さんは大穴牟遲神が殺されてしまったことを知って、大声をあげて泣き、天上界に行って天の神様、神産巢日之命（かむすひのみこと）に大穴牟遲神が生き返るように頼みました。キサ貝比売（きさかいひめ）と蛤貝比売（うむかいひめ）が遣わされ、キサ貝比売が自分の身を削った貝殻の粉を集め、蛤貝比売が自分の貝殻に受けて練り合わせ、それを大穴牟遲神に塗りますと、大穴牟遲神は、生き返ることができました。

八十神たちは、あきらめません。今度は大穴牟遲神を山に連れて行って、大きな木を切り倒し、その木にヒメ矢というくさびを打ち込み、大穴牟遲神をくさびでできた木の隙間に入らせると、すぐにくさびをはずして、大穴牟遲神を叩きつぶして殺しました。

母親の神は、大声で泣きながら大穴牟遲神を捜し出し、木を裂いて大穴牟遲神を助け出しました。それから大穴牟遲神に言いました。

「お前がここにいたら、しまいは八十神たちに殺されてしまう。紀伊の国の大屋毗古神（おおやびこのかみ）の所へ逃げなさい」

ところが、八十神たちは、追いかけてきて弓に矢をつがえて大穴牟遲神を引き渡せと言いました。大屋毗古神は、木のマタをくぐり抜けさせ、大穴牟遲神を逃がしました。

「須佐能男命（すさのおのみこと）のいらっしやる根の堅州国（ねのかたすくに）に行きなさい。きっと大神さまが助けてくれますから」

大穴牟遲神が、須佐能男命のところを訪ねますと、須佐能男命の娘の須勢理毗売（すせりびめ）が出てきました。二人は、目と目を合わせただけで恋に落ち、すぐに結婚しました。須勢理毗売は、家に帰って父の須佐能男命に「とても立派な神さまが、お父さまを尋ねて来ておられます」と言いました。須佐能男命は、「これは葦原色許男命（あしはらしこののみこと）という神だ」と娘に言い、大穴牟遲神を呼び入れて蛇の（むろ）に寝かせました。須勢理毗売は蛇の領巾（ひれ）を大穴牟遲神に渡し、「室の蛇がかみつこうとしたら、この領巾を3度振って追い払ってください」と教えたので、大穴牟遲神は室の中で安らかに寝ることができました。次の日はムカデと蜂の室に入れられました。また須勢理毗売の領巾で助かりました。次に須佐能男命は鎬矢（かぶらや）を大きな野に射込み、その矢を捜してこいと命じました。

大穴牟遲神が矢を捜しに入ると、須佐能男命は、野に火をかけました。どこから逃げ出せばいいのか分かりません。するとネズミが来て「中はほらほら、外はすぶすぶ」と言いました。内側はぽっかりあいて、外側がしまっているという意味です。ネズミの言うところを踏んでみると、大きな穴になっています。大穴牟遲神は穴に隠れて、野の火がおさまるのを待ちました。その間にネズミが鎬矢をくわえてきてくれました。矢の羽は、ネズミの子どもたちが全部食べてしまっていました。

夫が焼け死んだと思った須勢理毗売は、葬式の道具を持って泣きながら野にきました。父の須佐能男命もやって来ました。大穴牟遲神出て行って矢を返しました。須佐能男命は大穴牟遲神を家に連れて行き、柱のたくさんある大きな室に呼び入れ、頭のシラミを取らせました。大穴牟遲神が須佐能男命の顔を見ると、ムカデがたくさんいます。須勢理毗売はムクの実と赤土を採ってきて、夫に渡しました。大穴牟遲神はムクの実の皮をかじり砕いて、赤土を口に含んで吐き出しました。須佐能男命は、大穴牟遲神は、ムカデを齧って吐き出していると思い、可愛いヤツだと眠ってしまいました。

大穴牟遲神は、眠っている須佐能男命の髪の毛をつかんで、建物の棟か軒へおろしてある何本もある垂木（たるき）に結わえ付け、五百人力で引ける大岩を持ってきて室の戸口をふさぎ、妻の須勢理毗売を背負うと、須佐能男命の生太刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）、天の沼琴（あめのぬごと）を持って逃げ出しました。

そのとき、天の沼琴が、樹に触れて、大地が揺れ動くほどに鳴り響きました。その音で、寝ていた須佐能男命が目さまし、室を引倒してしまいました。けれど、結い付けられた髪をほどいている間に、大穴牟遲神は遠くへ逃げることができました。それでも須佐能男命は、葦原中国（あしはらのなかつくに）との境の黄泉比良坂（よもひらつさか）まで追いかけて来ましたが、遥か遠くの坂の上を見上げ、大穴牟遲神に声を掛けました。「お前が持っている生太刀と生弓矢で、八十神たちを坂の尾根に追い伏せ、河の瀬に追い払いなさい。お前が大国主神となり、また宇都志国主神（うつしくにぬしのかみ）となって、わが娘須勢理毗売を正妻として、宇迦の山のふもとに、地中の岩盤に宮殿の柱を太く立て、棟には千木（ちぎ）を高く立てて住むが良い。こいつめ」と言いました。

こうして、大穴牟遲神は、初めて国をお作りになったのでした。 参考資料「新版『古事記』」（中村啓信訳・平成24年第5刷 角川学芸出版）